

## 蜻蛉日記にみる女性の生き方（3）

開催日 平成 16 年 9 月 25 日

講 師 本学教授 田 中 荘 介

蜻蛉日記下巻は、筆者（作中人物）37歳から39歳までのわずか2年余の歳月のことが書かれている。下巻巻頭では兼家44歳、道綱18歳である。兼家は司召で大納言に昇進するが、「わたし」はうれしくもないと、宮中でますます地位を確固としたものにしていく夫を祝う気もない有様である。

中巻の冒頭で「三十日三十夜はわがもとに」と書いた願いは今や全くくずれ去って、もはや兼家へのあてつけで家を飛び出し石山寺まで駆けていくほどの張りも意地もない。もっとも父に郊外に別邸を建ててもらって移り住むのではあるが。

上巻、中巻と読み進めてきて、読者としてはさてこれから先いったいどうなっていくのか、と気がかりであるが、ここで注目しておきたいことは、筆者がわが身の上を忠実に記録していくことから、視点が少しずれて、自己客体化の方向へと筆を進めていることだ。言い換えると、日常的次元のことを物語的世界へと引き込もうとしているかのように見えるのである。

その兆候は次の4項目に見てとれる。

（一）兼家がある女に生ませた女子を筆者は養女として引き取って育てようと決心し、その女子が家に来た日のこと。兼家の来訪と鉢合わせになり、兼家はどこの子だと尋ね、じらした揚げ句、これはあなたの子ですと答え、兼家がおどろくところ。

（二）道綱の実らぬ恋の進行。母親として実らせたい恋ではあるが、相手の女は道綱を敬遠している気配。時移りある日、偶然車と車とがひっかかってその女に再会するが、女のほうでは「どなたでしょうか」と冷たい態度。

（三）兼家の弟遠度が、こちらの養女への恋慕の情を伝えてくる。まだ幼いからと筆者は断りつづける。そして困り果てて兼家に相談すると、それはおまえを恋慕しているのだろうと、とんでもない邪推。遠度はその後、不始末があって身を退く。

（四）事もあろうに兼家の兄兼通が筆者に恋文を送ってくる。ご冗談でしょうと断りの手紙を出すのだが。これらの事柄が、2年余の間に起こっている。兼家との結婚生活を日記風を書いて、告白体の作品として世に問おうという動機で筆をとった筆者であるが、ここまで書いて、書くということにのめり込んでいくうちに、次第に実人生を物語的世界へと引き入れていこうとしたかのような書きぶりである。